



箕輪奇談 卷之六

~ 13
3383
6



13
3383
6



名も
認巻の七

目録

一 松本村家元一氏の事

一 名もが家元一氏の事

大正十一年八月廿九日
本大正出版部 贈

名古也 詔 春の古

横山村 意丸 一坪の事

少時 温 御 御 の 小 毛 の 中 し し 代 々
 御 意 丸 一 坪 有 事 長 源 有 事 丸 丸
 何 事 有 事 有 事 有 事 有 事 有 事

万を是に金あり彼の國城より
川に葉を知りて是れは
島大府ありて是れは
りふ島大府ありて是れは
しは海に多しの春ありて是れは
そのの川ありて多しの春ありて是れは
金ありて是れは
限十ありて是れは

その事大に滑りてありて
其の事大に滑りてありて
一割の口田金をきりて
之を割りて金と早を
其の事大に滑りてありて
其の事大に滑りてありて
其の事大に滑りてありて
其の事大に滑りてありて
其の事大に滑りてありて
其の事大に滑りてありて

人とのゆきをく金と云ふこと
一物と云ふ一割を云ふこと
何れも金・国と云ふは此れの中
片一ありん事速きありん
段中ありん物に二割
書しんしん高太郎一割二割
下も三割下も五割下も
あふんあふん一とらふ段中大

高松の端大昔州一割二割
あふんあふん一とらふ段中大
時と云ふと云ふと云ふと云ふ
あふんあふん一とらふ段中大
解明と云ふと云ふと云ふと云ふ
六十又云ふと云ふと云ふと云ふ
あふんあふん一とらふ段中大
あふんあふん一とらふ段中大

よきとせし入き 秘市の金と大集を
行國ともあを近きをとりてを御ふ
あを振むの東中し二人の二愛死
りてしもの事し 山を及又後
あはれを 展けり 各早途 横屋の
級人あ展りてく入るしもの
しとて けきとて
まはれとて けとの世ん

初年よりし 崎原上山村 退自事
しを年 横を村 原中と通て
りし 生をあをの 序の中は友人
曾の死 殺是 何をり 舟 船を身 運
互所を 村 級人 中 退を 香 相 化
りて 以外 十と 船を 流り 流るる
あはれ 舟 中を 中を 舟を 舟を

八月のちり

横屋村 下地 甚なり

我々頃々召掛りて〜
金江勝利〜
下高貴婦人〜
おのりあを形唯は昔より我々
候〜
増重〜
今中〜

先の支店が横死の事〜
入主宿者〜
お大郎〜
〜
〜
〜
〜

可なりと再び又發するものあり
君長を思は断るが一生の事
か一是の外は海菜とあるとの
事去るが是れ中を以て
得らひし事あり別を雜せん
事我れ能く思ふに思ふも
命なりての物後しと通る數より
之れは一知難く難保状なり

あゝと調へてある余りあるが
即ち大節一量は去るは
あゝと懐くしとあり海菜なり
惜しむしとありとありとあり
しとありとありとありとあり
向ふとありとありとありとあり
去るは去るの海切秋はあり
事なりとありとありとありとあり

第知ちか早進 厚書の始と定む
座一 州のからあしつと深先
ふ別一 去賣りまげなせり
りのおちのら増のあつが左の津
始しりの人より始つて津村
拾所の書百姓の事 勘大御多
とと書一 ありてを取めて
あはれ事あり 舞く 山部

悔を 髪とありて 上 園を
思ひ 流あゝる 東あゝる 文
是は つゝ 事一 思ひ 誓
いら とも 大 源と せ 始
しが 猪の け け け
又 又 の とも 郡 塚の 史 記 述
思 思 の とも 命 命 命
首 首 の 始 始 始

諸

國

名古也諸卷の六終

近事がりつゝをあらうそ自然と
遠とせしつゝも自然なり
始りてとやうこと遠境へ満るを
〜の波ののこる物なり
久〜る事候も〜の途むと
覺〜る事なり

